

お台場の自由の女神像

児玉 寛嗣

ここ数年、大晦日から正月にかけて、娘たちの家族とお台場のホテルで過ごすことが恒例となっている。腹ごなしに海浜公園を孫たちと歩くと、浜辺の木道の一か所が通れないほどの人だかりとなっている。皆、立ち止まってスマホで自撮り。背景は自由の女神像だ。案内板に次のような像の由来の説明がある。

自由の女神像のレプリカがフランス革命 100 年を記念して 1889 年にパリのセーヌ川に浮かぶ島、シーニュ島に設置された。その像が「日本におけるフランス年」を記念して、期間限定で 1998 年に公園に移設された。レインボーブリッジを背景にした優美な姿は日仏友好のシンボルとして一躍、観光スポットとなった。返還期限が迫ると復刻像の再建を望む声が高まり、フジテレビなどが中心となりパリ市に申請、許可を得て、完全復刻像を製作して 21 世紀を目前にした 2000 年末に「新世紀に世界を照らす」と銘打ち除幕式が行われた。大きさは本物の 1/7 のスケールである。

昨年の夏、長女一家はアメリカに駐在する息子一家を訪ねた。その際、自由の女神を巡る遊覧船に乗ったそうだ。小学生の孫が本物の自由の女神とお台場の像を比較して素朴な質問。「ニューヨークの像は海の方を向いて立っているのに、なぜ、ここの像は陸を向いているの」。「そんなこと知るか」と言おうとしたが、そこは蘊蓄があるように見せかけた。「役割が違うんだ。ニューヨークの像は外国から船で来る客をようこそ、と歓迎するんだ。昔は飛行機なんかなくて皆、船で来たからね」

「ではここのは？」

「観光客が写真を撮る時に背景に写るように陸に向いて立っているのだ」

孫がどこまで信用したか知らないが、あながち間違いではないだろう。ところで、セルフイーをやっているのは中国人や東南アジア系が多い。円安で大挙して押し寄せた外人観光客。観光客の流れも円高を享受していた頃とは逆だ。安い日本はアジアの観光スポットになっていくのだろうか。お台場も外人が増えたようだ。